

法然とキリスト
「井上洋治著作選集」8巻
「法然(イエスの面影をしのばせる人)」を読んで

盛岡の善隣館書店に井上洋治著作選集が置かれていました。その中で5巻から9巻までを購入しました。私にとっては大きな出費で今月は節約をしなければなりません。故井上洋治神父は故遠藤周作氏の親友です。遠藤周作の著作の中に友人として井上洋治神父が出てきたことがきっかけで知ることになりました。この選集の3巻にパウロの働きに就いて書かれた「キリストを運んだ男」と言う著作は確か20年位まえに単行本として出版され購入して読んだことがあります。今回選集が出されたことを私は非常にうれしく思います。8巻の法然に関しての著作があり、梅原猛の「法然の哀しみ」という本をこれも20年位前だったと思いますが購入し読んだことがあります、その時からなにか法然について心に残っていましたが、今回の井上神父の著作でその理由がイエスキリストとの共通性にあったことがわかりました。

井上洋二神父は法然とキリストを比較しその共通点を私達に教えています。両者に共通していることは人間の救済についてですが、特に社会的に弱い立場の人たちや、当時の男尊女卑の社会での女性たちの救済について共通点があることを教えてくれています。それは神様、仏様から見れば全ての人間は全て同じであるということです。神様を信じ、信仰をもって生きている人たちは平等に神様の救済に授かることが出来る。また、法然は南無阿弥陀仏という念仏を心から念ずれば人は等しく救済されるということに於いてイエスキリストと法然は一致していることが確認できるということです、当時ユダヤ教では律法を学び、それを守ることが神の救済をうける必要条件となっていました。それが出来ない人たちは汚れた人たちであり神の救済から外れている人たちとされていました。したがって律法を学ぶことが出来なかった人たちや女性たちは汚れた人たちとされていたのです。同様に仏教においても厳しい修行を行い、切磋琢磨することによって救済の道は開かれるとされていました。当時の女性たちは

生まれつきその救済からは外れているとされていました。キリストも法然もこれに対して否と唱えています。しかし、修行を積むことや律法を学びその学びを深めることはキリストも法然も大切な事としていますが、しかし、神様も仏様もその救済に於いては人を選ばず、平等に天の道も極楽浄土の道も開かれていることを伝えています。それが愛の神であり、仏の慈悲なのだという教えです。これによって当時の律法学者や仏教団体から断罪され、キリストは十字架に付けられ、法然は島おくりの刑が執行されたのです。

ユダヤ教の律法学者にとってイエスの行動は受け入れられるものではありませんでした。自分たちが汚れている者と断罪してきた人々と共に食事をし、語り合い、とくに汚れた者として律法学者にとって特に許し難い娼婦や徴税人たちの罪を許すなど、決して受け入れられるものではなかったのです。法然にしても、何の修行もしないでただ一言「南無阿弥陀仏」という念仏を唱える人は誰でも救済されるということは、困難な修行を行い、自分を高めることで救済の道が開かれると信じている僧侶たちには、受け入れられない事でした。しかも、男尊女卑の時代に合って、女性も救済に与ることが出来るという教えは全く許しがたい物だったのだと神父は言っています。法然の教えは多くの人たちに受け入れられましたが、ただ一言念仏を唱えれば救済されるということで、罪を犯しても念仏を唱えれば地獄に落ちることが無く、再び罪を犯してもまた念仏を唱えれば良いと考える人たちが現れたのです。これは法然の意図したことではなく、念仏を唱え、罪を犯すことなく、希望をもって、新しい人生を歩むことに努力することが法然の意図したことでした。これによって法然は自分の教えが本当に人々の救済になるのかどうか悩んだ人であると言っています。

イエス・キリストも信仰を持ち神様を信頼すれば、それだけで救われるという教えです。しかし、信仰を持ってさえいれば何をしても許されるということではないことは、私たちは良く知っています。信仰を持って生きるための生き方を探求することを、そして、定められた礼拝を守ることが求められています。毎週1度の礼拝を守り、神との応答することが私達クリスチャンとしての務めなのです。神を信仰する者としての有り方を探求し続ける努力が私たちに求められています。神様を信じていると言いながら、罪を犯してしまうことを自覚

できない人間は信仰を持っているとは言えないのかもしれませんが。人間の浅はかな欲望によって、自分の都合の良いように宗教を変えてしまうことは、神様をまた仏様を信じて生きていることとは言えないのです。利己的な思いで、宗教を利用していることに過ぎないのです。このような見せ掛けだけの生き方は、信仰を持って生きているとは言えないのです。イエスキリストも法然も、より多くの人が救済されるためにはどのように生きなければならぬのかを命を懸けて探求された方です。仏教の世界で日本の高僧と言われている人たちは立派なお寺を持っていますが、法然はこのような寺は持っていませんでした。イエスキリストも両親の家はありますが、自分自身の家は持っていません。この点も2人に共通しているところです。

多くの共通点があるからキリスト教も法然の伝える仏教も同じ宗教であるとして、両方を信仰するというのは誤った考え方だと神父は言っています。人間の救済は男女の区別なく、社会的な地位や経歴、経済状況など関係なく平等に救済の道は開かれているということで仏教もキリスト教も共通していますが、仏教を求めている人たちはその仏教の道を歩み、キリスト教を信じる人たちは神様を信頼しその信仰の道を歩むのがそれぞれの信仰者の有り方であると井上神父は言っています。一人の人間が両方の道を同時に歩むということは信仰を持って生きるためには不可能な事であると断言しています。そして、長い歴史の間多くの人々に信じられてきた宗教を、自分が信仰している宗教と違うということで、その宗教は誤りであるとか無意味な信仰であると批判することや、その信仰を排除することは、自分の信じている宗教も間接的に否定しているのではないかと言っています。正しい信仰者は自分の信仰を別の視点で見ながら、自分の信じている宗教をより深い視点で考察することが出来るのです。そのような信仰の生活をおくることによって私たちはさらに豊かな信仰生活をおくることが出来るのではないのかと神父は語りかけています。お互いにそれぞれの信仰を尊重し、それぞれの信じる所によって祈り合うことが真の仏教徒、またキリスト教徒の姿なのだと言っています。井上神父によれば、真の信仰を持っている人たちは自分自身を相対的に見る事が出来るということです。相対的に見るとは自分自身の姿を自分から離れた視点で見ることが出来るということです。これによって自分の信じている神を信頼し、同時に、他の宗教に対してそ

の宗教の持っている理念を認めることが出来るのだと言っています。長い歴史の中で多くの人々によって推敲され追及されてきた宗教はそれが正しいとか正しくないという判断は出来ないというのです。宗教は信じるか、信じないのかどうかであり、たとえ自分の信じている宗教と他の人が違う宗教を選択したとしてもそのこと許容する心が真の宗教者には備わっているのだと語っています。自分が信仰している宗教のみが正しいという考え方はお互いに愛し愛される関係性を排除する危険性を孕んでいると言っていると思いました。長い歴史の中で培われてきた伝統的な宗教にはそれぞれ大切な、尊重すべき教えや考え方が有ることを認め合う、広い心が私たちには求められているのです。この心が失われてしまうと、利己的な原理主義が台頭し、争いや、戦争が起きるのが私たちの歴史でした。未だに、中東ではイスラムとユダヤ教、キリスト教、の間で争いが絶えません。ミャンマーではロヒンギャの人たちが仏教徒によって迫害されています。私たちの世界では真の平和な世界には程遠い状況です。

この著作を通して日本人として育ち仏教の影響の強い環境のなかで、仏教そしてキリスト教を信仰することの尊さ、そして、それぞれが、それぞれの信仰生活を真摯に生きることについて喜びが与えられていることを感じる事が出来ます。遠藤周作の著作の中に日本人に合ったキリスト教の有り方と言うことが大きなテーマになっていましたが、そのテーマに井上神父の考えが大きく影響し、関与していたことを伺うことが出来るのです。法然以外にも、選集の中には宮澤賢治、芭蕉、西行、良寛、等の人物に対しての著作も含まれています。

キリスト教の神様の豊かな祝福が、人種や思想、そして宗教を超えて、それぞれに有ることを改めて確信できるのではないのでしょうか。仏教やイスラムにおいても同様に私達クリスチャンにその慈悲や祝福があるのだと思いました。